

「つゆひかり」のてん茶生産に適した被覆法

[研究のねらいと取り組み]

- ・近年、県内において、てん茶の生産が増加しているが、てん茶用品種の利用はほとんど見られない。
- ・てん茶用品種への転換は時間やコストがかかり、速やかに抹茶需要に対応するためには、既に静岡県内で栽培されている煎茶用品種によるてん茶生産が必要となる。
- ・このため、静岡県内で栽培面積が増加している「つゆひかり」について直接被覆方法を検討した。

[研究の成果]

- ・直接被覆法による収量は、遮光用資材の遮光率が高くなるにしたがって少なくなる傾向にあった(図1)。荒てん茶の官能評価は、遮光率95%及び98%の被覆処理は、遮光率85%よりも香気と滋味が優れた。また、外観(主に色沢)及びから色は、いずれの被覆処理でも良好であった(図2)。
- ・遮光率85%で被覆処理した場合、一番茶収量は、1.5葉期区が2.5葉期区と3.5葉期区よりも少なかった(図3)。荒てん茶の官能評価では、一番茶では全ての項目で1.5葉期区の評点が高く、3.5葉期区は、外観、香気及び滋味が1.5葉期区と2.5葉期区に比べ評点が低かった(図4)。
- ・「つゆひかり」の特徴である「色」の良さを生かすには、遮光率を95%あるいは被覆を早期(1.5葉期)に開始し、収量性を重視する場合には、遮光率を85%あるいは被覆開始時期を晚期(3.5葉期)にすることが有効と思われる。

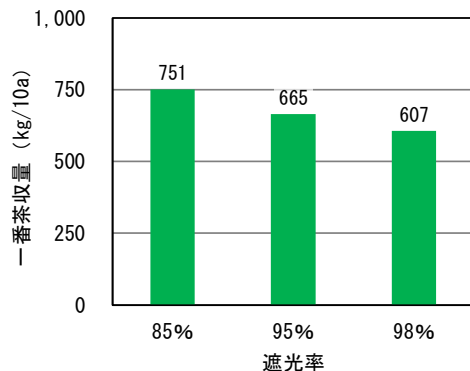


図1 遮光率の違いが一番茶収量に及ぼす影響 (2018年)

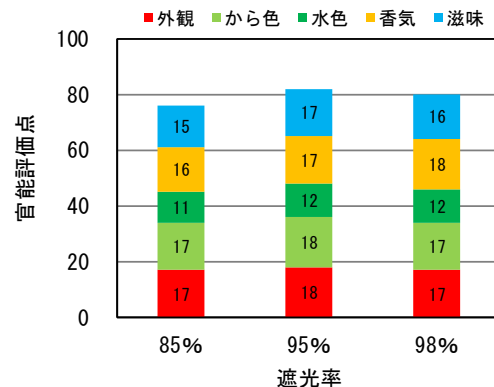


図2 遮光率の違いが一番茶荒てん茶品質に及ぼす影響 (各項目20点満点、2018年)

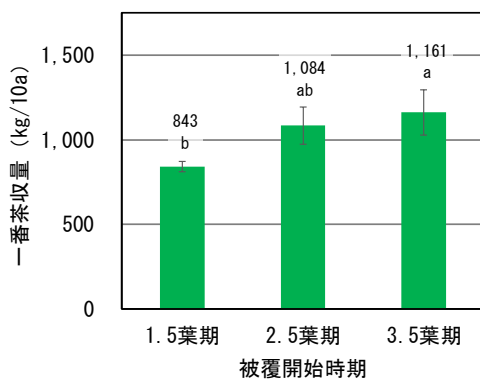


図3 被覆開始時期の違いが一番茶収量に及ぼす影響 (遮光率85%、2019年)

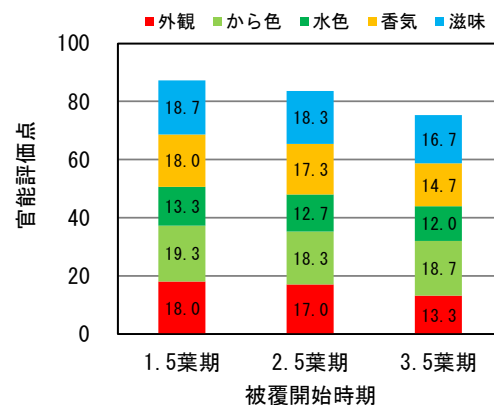


図4 被覆開始時期の違いが一番茶荒てん茶品質に及ぼす影響 (遮光率85%、各項目20点満点、2019年)